

繰り返される崩壊

— “The Raven” と Poe の愛した女性たち

小林 潤

1. はじめに

Edgar Allan Poe の詩は、一定のリズム感を持ち、また脚韻を踏んでいる数が多いため、音楽性の観点でも馴染み深いという特色を持っている。Poe は詩作において音楽性を非常に重要だと考えており、「言葉に音楽がつくと詩であり、音楽のない言葉は散文にすぎない」(8) とまで述べている。しかし、音楽的かつロマンティックな世界観を持った彼の詩は、同年代の詩人 Walter Whitman とは対照的に、アメリカの詩人や批評家に評価されることはほとんどなかった。一方で、悲哀と哀愁に彩られている彼の詩は、アメリカとは異なりフランスでは高い評価を得ていた。Charles-Pierre Baudelaire、Stéphane Mallarmé、Ambroise Paul Toussaint Jules Valéry といった名だたる象徴派詩人たちが Poe に影響を受け、彼の詩が当時のフランスの象徴主義や象徴派詩人への後押しになったと言われている¹。

Poe は 1845 年に第四詩集 *The Raven and Other Poems* を *The Evening Mirror* に発表し、翌年 1846 年には詩論 “The Philosophy of Composition” で Poe が「大鴉」² やその他の詩の創作意図や創作方法を自ら説明した³。Poe はこれまでに処女詩集 *Tamalane and Other Poems*⁴ (1827) と *Al Aaraaf, Tamalane, and Minor Poems* (1829) を発表してきた。また 1845 年以降にも彼が亡くなるその日まで “Annabel Lee” (1849) や “Ulalume” (1847) といった数々の詩を遺している。

He wrote very few poems, and of those few only half a dozen have had a great success: but those few are as well known to as large a number of people, are as well remembered by everybody, as any poems ever written. (Kopley 191)

Richard Kopley曰く、劇作家で文芸批評家でもあるT. S. EliotはPoeの詩作に関してこのように述べ、大衆に広く知られている彼の詩を評価していた。更に大串尚代が「ポー作品選集によせた序文の中で、W・H・オーデンは才能があったにもかかわらず特定の作品しか知られていない不遇の作家・批評家ポーの再評価を試みている」(129)と述べているように、アメリカ文学史の中でPoeの詩作の再評価の流れが生まれた。発表した当時こそ高い評価を得られなかったPoeの詩は、20世紀になると徐々に好意的に評価されるようになった。

その中でも「大鴉」はPoe独自の詩論に基づいて論理的に構築されており、一般読者と批評家の双方に受け入れられる最高傑作となった。すぐに世間にコピーが出回り、パロディが流行し、Poe自身も様々な講演⁵に呼ばれた。その後Kopleyが“‘The Raven’ is read, analyzed, and discussed in middle schools, high schools, colleges and universities, and elder hostels” (191)と述べている通り、幅広い世代の人々に読まれた。

この詩は語り手の回想として語られる。時は嵐の夜。大切な女性を亡くして哀しみに暮れている語り手の部屋に、不吉な大鴉がやってくる。大鴉は“Nevermore”とだけしか喋らない。しかし同じ言葉を繰り返す大鴉と会話していくうちに、語り手は女性の喪失も相まって自ら深淵へと追い詰めていく。自らを追い詰めつつも、大鴉が現れる意味を語り手が理性的に探るのがこの詩の内容となっている。

Poeの詩の特色として、先に述べた音楽性の他に、彼自身の悲痛な経験が反映している物語性が挙げられるだろう。Poeの抒情詩には彼の生き方そのものが強く反映されている。「大鴉」は毎スタンザの末尾に“Nevermore”が繰り返し用いられることで有名な物語詩だが、この言葉によって喚起される悲痛が、読む者や聴く者の胸に迫ってくるのは言うまでもない。病気と貧困にあえいだ幼少期、父の失踪、母の病死、そし

て商人の養子になってからも受け続けた侮蔑やいじめ、最愛の妻との死別といった波乱万丈な人生をPoeは送ってきた。希望、憧憬、喪失、傷心、絶望によって傷つき疲弊したPoeの「生」—詩によってこそ表現できる「生」—の声は、いったいどのように詩作に表れているのだろうか。そして、この決まり文句によって起こる語り手の理性や世界観の崩壊がいったい何を意味しているのか。Poeはその崩壊を何故この詩の中で描いたのだろうか。本論では、主に「大鴉」の読解を通じてこれらの問いを考察する。

2. 「構成の哲理」

「大鴉」を読み解くうえで必要不可欠なものといえば、翌年書かれた詩論「構成の哲理」である。

Nothing is more clear than that every plot, worth the name, must be elaborated to its dénouement before anything be attempted with the pen. It is only with the dénouement constantly in view that we can give a plot its indispensable air of consequence, or causation, by making the incidents, and especially the tone at all points, tend to the development of the intention. (163)

冒頭にPoeはプロットを組み立てるなら、執筆以前にまず到達する結末を決めなければならないと主張している。なぜなら結末を念頭に置けば、全体の調子を調整することでプロットに必要な不可欠な必然性を与えることができるからである。確かに結末を初めに決めてしまえば、話の道筋が自然とその結末に向かうのは道理である。「構成の哲理」は詩論であり、大半は「大鴉」を作るうえで何をどのような順序で展開していったかについて言及されている。しかしこの構成方法は詩のみならず小説にも当てはまる。

Poeが作品の中に女性の死を多く取り入れる理由も“the death, then, of a beautiful woman is, unquestionably, the most poetical topic in the world” (163) と書かれている。彼は若く美しい女性の死が世界で最も詩的だからという理由だけで、「大鴉」に女性の死を描いたのだろうか。また、

死が最も詩的と考えるようになったのはなぜなのか。これらを考えるうえで切り離せないのが、Poeがその生涯で愛した女性たちである。

3. 最愛の女性との別れ

Sean James Kellyはまず初めに「大鴉」の語り手の心理的状況を“the speaker’s condition begins to resemble more closely the psychological state of melancholia than that of mourning” (Kelly 117)と主張したうえで、フロイトの言葉を借りて、人の死に対する哀悼と憂鬱の差異を次ように述べている。

Most significantly, Freud observes that unlike mourning, melancholia concerns an “unknown loss” in that the suffer “knows whom he has lost but not what he has lost in him. That is, while mourning concerns only a consciously experienced loss, melancholia is “in some way related to an object-loss which is withdrawn from consciousness.” (117)

Poeほど女性にこだわり、しかもその女性が死んでいく運命を嘆き悲しんだ詩人はいないだろう。彼は美しい女性の死という独自性とはいえない、むしろ普遍性の強いテーマを生涯追及してきた。PoeにはVirginia Eliza Clemm Poeという14歳年下の妻がおり、しかも彼女はPoeにとって従妹にあたる関係だった。しかしヴァージニアは1842年に結核にかかり、この病によって1847年に24歳という若さで生涯を終えてしまうこととなる。最愛の女性を失うという点では、彼の実の母親と養母もそれにあたると言えるだろう。Poeは旅役者の夫婦David Poe, Jr.とElizabeth Arnold Hopkins Poeの二男としてボストンに生まれたが、Poeがまだ2歳半の時に父デイヴィッドは失踪し、同時期に母エリザベスを病気で亡くしている。孤児となったPoeは、その後商人John AllanとFrances Allan夫妻に養子として迎え入れてもらい、特にフランセスには我が子のように可愛がってもらったという。その後14歳になったPoeは学校の級友の母親Jane Stannard⁶に恋をするも、数年後に彼女は精神を病んで亡くなっ

てしまう。そして近所の Sarah Elmira Royster という娘と知り合い、密かに婚約するも、ヴァージニア大学時代の Poe とアランの軋轢を理由に婚約を解消されてしまう。そしてついに 1829 年、Poe を本当の息子のよう
に可愛がってくれていた養母フランセスとも死別することになる。この
ように母親、養母、恋人、妻といった様々な形の愛する人との別れを Poe
は何度も経験してきた。Poe にとって愛する人を失うことはもはや宿命だ
と感じたのではないだろうか。「大鴉」を書いた時にはヴァージニアはまだ
生きていたが、結核が進行しておりその寿命は風前の灯だった。故に
Poe はこの若い妻に死の影を感じ取ることで、「大鴉」にもそれを強く反
映させたのだろう。

「大鴉」は全 18 連から構成されており、大鴉⁷ と恋人 Lenore の死を嘆き
悲しむ語り手が登場する。第 16 連では語り手にとっての Lenore の神秘性
や重要性が次のように描写される。

“Prophet!” said I, “thing of evil! —prophet still, if bird or devil!—
By that heaven that bends above us—by that God we both adore—
Tell this soul with sorrow laden if, within the distant Aidenn,
It shall clasp a sainted maiden whom the angels name Lenore—
Clasp a rare and radiant maiden whom the angels name Lenore.”
Quoth the Raven “Nevermore.” (775)

このレノアという女性は、約二年前に書かれた詩 “Lenore” (1843) に
も登場する。「レノア」も若くて美しい女性の死を歌っているのだが、「大
鴉」と大きく異なるのは語り手が一人ではないことだ。第 1 連と第 3 連で
は牧師がレノアに対して懺悔するよう語り掛け、周りの者には死者を送
る歌を歌うよう語っている。残りの第 2 連と第 4 連では妻に先立たれた夫
が、死者を悼まない周りの人間の無情さに怒り、レノアに対しては安ら
かに天国に行くよう語り掛けている。「レノア」はヴァージニアが結核に
罹る翌年に発表されているが、当然執筆中は徐々に弱ってゆく彼女のこ
とを目にしていただろうし、ヴァージニアの存在がレノアというキャラ
クターに影響を与えていると考えるのが自然だろう。母や養母やスタナー

ド夫人も無関係ということはないが、最も色濃く反映されているのはヴァージニアだろう。

ここで語り手は大鴉のことを「悪なるもの」や「悪魔」と呼び捨てている一方で、彼女のことを「天使らがレノアと名付けた聖なる乙女」や「類いなき光り輝く乙女」とまるで大鴉の対極に位置しているかのように描写している。神秘的な存在だった彼女を喪失することで、それまで幸せだった彼の人生に「死」が侵入したのである。同時に崩壊、混乱、破滅といった負の感情が彼の中で活動を始めたことを意味する。先に述べた通り、Poeは女性の死こそ世界で最も詩的なトピックだと考えているため、その考えを元にレノアの死を描いたのは間違いない。しかし、レノアの死を描くということは、詩の理論や理屈以上にPoeの生涯が深く関わっている。Poeにとってはヴァージニアの結核の症状が悪化する不安は常に持っていただろうし、最悪のことを考えると彼女の死に怯えていたのかもしれない。最愛の女性を失うことがいかに辛いか、過去に何度も経験しているPoeには分かっている。だからこそ今最も愛しているヴァージニアを失うことの恐怖は想像を絶するものだろうし、レノアにヴァージニアが投影されているからこそ作中の彼女の描写が非常に神秘的なものなのである。

ここで着目したいのは、大鴉が“Nevermore”以外の言葉を一切発していないということである。たった一語の無情な響きによって、疲弊しきったPoeの「生」が永遠の悲哀へと昇華し、語り手を発狂させてしまう。語り手が大鴉に抱く冥府の神のイメージ、自らの問いかけに言葉を返したという印象はすべて語り手の思い込みであり、大鴉はただ一つの言葉を繰り返しているだけなのである。つまり最愛の人間が死んでしまった語り手は、何度も自問自答することで負の感情に取りつかれ、「生」や「光」の象徴である愛しの女性を、大鴉という「死」や「闇」の象徴に覆わせてしまっているのである。

Then, methought, the air grew denser, perfumed from an unseen
censer

Swung by Seraphim whose foot-falls tinkled on the tufted floor.

“Wretch,” I cried, “thy God hath lent thee—by these angels he hath
sent thee

Respite—respite and nepenthe from thy memories of Lenore;

Quaff, oh quaff this kind nepenthe and forget this lost Lenore!”

Quoth the Raven “Nevermore.” (775)

第14連は語り手が大鴉に話しかけているのではなく、彼の空想の中で自分自身に話しかけている場面である。「哀れ者」と叫んだのも、ネーペンテース⁸を飲んでレノアの喪失を忘れようと問いかけたのもどちらも自分自身に対してである。語り手は愛する女性の喪失感に浸っている自分のことを哀れな人間だと思っているし、ネーペンテースを使ってすべて忘却し夢見心地の世界へと行きたいと考えている。しかしそれができないが故に彼は悩み苦しみ大鴉という悪魔にさらに飲み込まれていくのだ。空想の中にまで大鴉が現れてしまった語り手は更なる恐怖に怯え、理性の崩壊も加速する。

Poeは生涯で多くの最愛の女性を失ってきた。しかもそのほとんどが病による死別である。その時々に関わり自分にとって掛け替えのない存在だった女性を、まるで運命かのように失ってきたのだ。恋人との生活に希望や光を見出していた語り手が徐々に破滅していくさまも、母や恋人との生活を夢見ていたPoeが彼女らの死によって徐々に精神的に病んでいくさまと関連付けることで、美しい女性の死という独特なテーマを詩作に盛り込んだといえよう。そうすることでPoeの「生」の中にある剥き出しの悲哀を表現し、詩の読者の感情に真に迫ることができたのだろう。

4. 反復がもたらす崩壊

反復とは詩の表現方法の一種で、同じ言葉や、ほぼ同じ表現を二度以上繰り返す、調子を整えたり、感動を強調したりし、別名refrainとも呼ばれる。年代のWhitmanが自由詩を作るうえで反復(repetition)を重要視していた一方で、Poeは自由詩に脇目も振らず、反復(refrain)を用いて抒情詩を作った。Kellyが“Poe suggests that the aesthetic effect of his monotonous refrain is the poetic equivalent of an enharmonic change in

music” (129) と述べているように、Poeは自身が用いる refrainの審美的効果は、音楽における異名同音的転換⁹と同等であることを提案している。

In both cases, intellectual pleasure and emotional responses are derived from the novelty of a shifting background (harmonic or conceptual) in contrast to a static phrase (melodic or linguistic). Recent scientific research on the emotional and physiological responses of listeners to enharmonic changes in music would seem to lend support to Poe’s claim that a similar production of novelty in the scene of reading might also produce pleasure. (129)

また、Kellyによると、異名同音的転換の感情的で生理的な反応に関する近年の科学的な研究が、Poeの主張や考え方を支援しているのだという。知的な喜びや感情的な反応を生み出す異名同音的転換が refrainと同等だということは、refrainもまたそれらを生み出すことが可能ということである。

Poe自身も「構成の哲理」の中で反復の効果として “As commonly used, the *refrain*, or burden, not only is limited to lyric verse, but depends for its impression upon the force of monotone — both in sound and thought. The pleasure is deduced solely from the sense of identity — of repetition” (164) と述べ、同じ言葉の繰り返しのもたらす「音と思考へのモノトーンの力」により快楽が生じることをあげ、同時に繰り返しを何度も反復することにより、絶望さえも快楽に変わることを指摘している。しかし一方で “this word ‘Nevermore’ should involve the utmost conceivable amount of sorrow and despair” (165) とも述べられている。つまりPoeにとって反復とは快楽を与えるだけのものではなく、悲しみや絶望までも与え得るものだという。反復がマイナスのイメージを与える点は、まさに Sigmund Freudが提唱する「反復脅迫」と同じといえる。反復脅迫とは人が心理的に不安に感じている時、不幸な状況を何度も繰り返すことでより惨めになっていくことを指す。

Es bleibt genug übrig, was die Annahme des Wiederholungszwanges rechtfertigt, und dieser erscheint uns ursprünglicher, elementarer, triebhafter als das von ihm zur Seite geschobene Lustprinzip. (16)

Enough is left unexplained to justify the hypothesis of a compulsion to repeat something that seems more primitive, more elementary, more instinctual than the pleasure principle, which it sets aside. (Strachey 33)

人間は生まれながらにして強い快感原則を持っているが、フロイトは快感原則と反復脅迫の関連性について、反復脅迫は快感原則より根源的だと述べ、またそれ自体の発生源は無意識的な抑圧されたものにあると述べている。ここでいう反復脅迫を、繰り返し登場する大鴉と繰り返し発せられる“Nevermore”に当てはめて考えると、語り手はその反復脅迫によって精神的に更に追い詰められていると言える。第10連になると、追い詰められている語り手と大鴉の間に成立しない不可解な会話が描写され始める。また、“my hopes have flown before” (774) と書かれているように、語り手にとっての希望は失われ、大鴉に抑圧された状況に置かれていることがわかる。

Poeが反復を用いた理由は、Poeの言葉を借りて「『その後の度重なる反復』によって、男は次第に『迷信的』となり、『半ば自虐を楽しむ絶望感から』次々と問いを発し、『狂乱の快楽を経験する』ことが出来るから」¹⁰ (42) だと安藤邦男は主張している。それでは、何故Poeはその反復を用いて語り手に、名状し難い恐怖“fantastic terrors” (773) を感じさせ、彼の理性の内部崩壊を引き起こさせたのだろうか。

Poe is rather a scientist than an artist. He is reducing his own self as a scientist reduces a salt in a crucible. It is an almost chemical analysis of the soul and consciousness. (Lawrence 74)

D. H. Lawrenceの主張によると、彼の作品の多くに理性や秩序の崩壊が描

写されているのは、Poeの奥深くに自分自身の身体や精神の崩壊が根付いているからだという。秩序の崩壊は詩以外にも、邪眼を持つ老人を殺したはずが、なぜか心臓の音が聞こえ徐々に語り手が狂気の淵へと追いやられる“*The Tell-Tale Heart*” (1843)、その他にもドッペルゲンガーに理性が崩壊させられていく“*William Wilson*” (1839)、黒猫に崩壊させられる“*The Black Cat*” (1843) も同様に語り手が崩壊する様子が描かれている。彼の根底にはいつも秩序の崩壊があり、そして大鴉と語り手の関係のように必ず崩壊させるものと崩壊するものが存在する。岩瀬悉有はPoeの根底に崩壊や破滅のヴィジョンがあることで、『旧い意識の崩壊と、旧い意識の殻を脱ぎ捨てる』ことにより、『新しい意識の形成』を持つ (17) ことができると述べている。つまり、創造的破壊という用語があるように、“*Nevermore*” の反復によって古いものを破壊し、新しいものを創造している。

5. 終わりに

「大鴉」出版後、1847年に妻ヴァージニアは約5年間の闘病生活の後24歳という若さで逝去する。彼女の死によりPoeはますます自暴自棄になり、荒んだ生活を送ることになる。彼の人生は常に最愛の女性の死と隣り合わせだった。

反復は決して快樂だけをもたらすのではなく、恐怖や不快感ももたらすため、Poeの数々の抒情詩には彼の痛切な経験が多く反映されている。彼の実人生には反復が深く根付いているため、彼の作家活動と反復は切っても切り離せないものになった。

Die neue und merkwürdige Tatsache aber, die wir jetzt zu beschreiben haben, ist, daß der Wiederholungszwang auch solche Erlebnisse der Vergangenheit wiederbringt, die keine Lustmöglichkeit enthalten, die auch damals nicht Befriedigungen, selbst nicht von seither verdrängten Triebregungen, gewesen sein können. (13)

But we come, now, to a new and remarkable fact, namely that the

compulsion to repeat also recalls from the past experiences, which include no possibility of pleasure, and which can never, even long ago, have brought satisfaction even to instinctual impulses that have since been repressed. (Strachey 27)

フロイトは反復脅迫は快楽を一切含まない過去の経験を反復させると述べており、Poeにとっての「反復する過去の経験」は最愛の女性の死である。だからこそ彼の詩は、リズムや音楽性を持たせるために、韻律の反復が用いられ、それが登場人物に反復脅迫をもたらす構造になっている。もちろんこれは詩だけでなく、彼の作家活動自体に反復の経験が活かされている。

大鴉に“Nevermore”と繰り返し喋らせて恐怖を表現しているように、Poeはほとんどの作品で恐怖を生み出している。Poeの書いた恐怖が彼の作品の中で反復を続けた結果、そのほとんどの主人公は恐怖に追い詰められ、崩壊の結末を迎えた。大きな時代の変革を必要とする時には、創造的破壊なしに、既存のものを温存したままの変革で済ませることは決してできない。Poeは19世紀前半の激変の時代に、作品の中で恐怖の反復を続けることで、解決の先延ばしをすることなく、長く固執している体制や意識を破壊し、新たな改革を創造してゆく必要性を述べているのである。

注

- ¹ 近年の研究では「パトリック・F・クインは、ポーを読んだ経験が深遠で、特別だったからこそ、ボードレールはポーを批評的公平さで吟味することができなかった」(105)と飯野は主張している。
- ² Poeが“The Raven”を書く上で参考にしていた作品に関して、鴻巣友季子は「一説によれば、この詩はチャールズ・ディケンズの小説『バーナビー・ラッジ』(Barnaby Rudge, 1841)に登場する人間の言葉を喋る大鴉に着想を得たとされている」(768)と述べている。
- ³ 「大鴉」は「構成の哲理」の通りに制作されたという主張がある一方で、伊達立晶は「ポーと面識のあったワイズ夫人(Susan Archer Talley Weiss)は、ポーが『大鴉』を10年間も机の中に保管して推敲を繰り返していたと証言し、『構成の哲学』のとおりに『大鴉』が制作されたわけではないことを示唆している」(16)と述べている。

- 4 初期の詩はWilliam Shakespeareをはじめ、John MiltonやGeorge Gordon Byronの作品からインスピレーションを得たとされている (Kopley 191)。
- 5 八木敏雄は当時Poeが講演会で「『アメリカの詩と詩人』という話をして、女性詩人フランセス・オズグッドを持ち上げ、両人のあいだにロマンスが持ち上がった」(18)と述べている。
- 6 八木によると、スタナード夫人の死はPoeに深い悲しみを与え、「高名な抒情詩『ヘレンに』は彼女に捧げられたもの」(6) だという。
- 7 「最初は大鴉ではなく“parrot”をイメージしていた」(165)とPoeは詩論「構成の哲理」で述べている。
- 8 ネーペンテースとは、古代ギリシア人が考案した悲しみや苦痛を忘れさせるための薬である。
- 9 異名同音の転換とは、減5度と増4度のように、ある音を別の名で呼びかえることである。
- 10 安藤は反復を有効に用いる理由として、他にも「男の問いを最初は平凡なものにしておいて、次第にそれを異常なものに高めていく」(42) ことを挙げている。

引用文献

- Erkkila, Betsy. “The Poetics of Whiteness: Poe and the Racial Imaginary.” *Romancing the Shadow: Poe and Race*, Oxford UP, 2001, pp. 41-74.
- Freud, Sigmund. *Jenseits Des Lustprinzips*. Forgotten Books, 2017.
- . *Beyond the Pleasure Principle*. Translated by James Strachey, Createspace Independent Publishing Platform, 2010.
- Goddu, Teresa A. “Poe, Sensationalism, and Slavery.” *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe*, edited by J. Gerald Kennedy, Cambridge UP, 2002, pp. 92-112.
- Jones, Joseph. “‘The Raven’ and ‘The Raven’: Another Source of Poe’s Poem.” *American Literature*, vol.30, no.2, 1950, pp. 185-93.
- Kelly, Sean James. “Staging Nothing: The Figure of *Das Ding* in Poe’s ‘The Raven.’” *The Edgar Allan Poe Review*, vol. 17, no. 2, 2016, pp. 116-41. JSTOR, JSTOR, www.jstor.org/stable/10.5325/edgallpoerev.17.2.0116.
- Kopley, Richard and Kevin J. Hayes. “Two verse masterworks: ‘The Raven’ and ‘Ulalume,’” *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe*, edited by Kevin J. Hayes, Cambridge UP, 2002, pp. 191-204.
- Lawrence, D.H. “Edgar Allan Poe.” *Studies in Classic American Literature*, Atlantic P & Distributors, 1995, pp. 70-88.
- Poe, Edgar Allan. “The Philosophy of Composition.” *Graham’s Magazine*, vol. 28, no. 4, George R. Graham & Co., 1846, pp. 163-67.

——. *Edgar Allan Poe: Complete Tales and Poems*, 2003 ed., Castle Books, 2009.

安藤邦男『エドガー・アラン・ポオ論ほか』英潮社, 2009.

岩瀬悉有「エドガー・アラン・ポアの『大鴉』：崩壊する理性のふるえ」『関西福祉科学
大学紀要』10 (2007), 11-17頁.

大串尚代「[[批評] 論争家ポー」『生誕200周年記念必携 エドガー・アラン・ポアの世
紀』八木敏雄・巽孝之編, 研究社, 2009, 128-41頁.

鴻巣友季子・桜庭一樹編『ポケットマスターピース09 E・A・ポー』集英社, 2016.

伊達立晶「ポーの『構成の哲学』について」『文芸学研究』4 (2001), 16-50頁.

八木敏雄「ある作家の生涯 (1809-1849)」『生誕200周年記念必携 エドガー・アラン・
ポーの世紀』八木敏雄・巽孝之編, 研究社, 2009, 5-23頁.